

仏教伝来と仏像の伝説

——光るほとけ——

はじめに

紀元前五世紀後半頃インドに興った仏教は、中国・朝鮮をへて六世紀前半に日本へ伝わった。インドから日本まで、仏のきた道筋はおよそ七万五千キロ。たどり着くのに約千年かかったことになる。

仏教が伝わった道はアジアの国ぐにを西から東へ、都市をむすぶ形でつながっている。仏教の流通に古代アジアの国ぐにの王権が深くかわっていたことを示している。古代アジアの国ぐに、といっても一様ではなく、王権の性格も異なる。日本のばあい、砂漠や山河によって距てられた広大なアジア大陸と違って、海に囲まれていた。日本に成

立した古代国家と王権の性格は、よほど特異なものと思われる。

仏教の流伝、といっても実情はさまざまであった。仏教を伝えたのは、西の国から訪れた商人や移住者、僧、王の使者たちであろう。もたらされた仏教にしても、はじめから仏法僧がそなわり、仏教の本質について深い理解が伴うことは稀で、仏像や経巻、荘嚴の器物、僧などが別べつに伝わることも少くなかった。また、これらを崇めて呪術的な効果をもたらしことも期待されたようである。仏教の本質が日本に伝わり受容されるには、初伝いらい百余年を要したと思える。

このような関心から、ここでは仏教伝来に関する史伝と

名 畑 崇

伝説の合間から事がらを尋ねてみた。その中で仏像の伝来に関するものを主として取りあげてみたが、見出される事からは広汎にわたり、それぞれ分析、検討しなければならぬ所が多い。今はその余裕がないので事がらの指摘にとどめ、全体の素描を試みた。大方の教示を仰ぎたい。

一

『日本書紀』によると、日本に仏教がはじめて伝わったのは、欽明天皇壬申(五五二)年十月のことである。百濟から聖明王の使者が訪れ、金銅釈迦仏像、幡蓋・経論若干を献じた。上表文には、仏法が諸法にすぐれ、天竺から三韓に至る国ぐにで敬うとのべ、流通をすすめていた。仏像の相貌は「端嚴(きらきら)しく、天皇が「歡喜踊躍」して礼拝の可否を群臣に問うた。大臣蘇我稲目は賛成、大連物部尾與が反対し、蘇我稲目が仏像を授かり向原の家に安置したという。

『元興寺伽藍縁起』もほぼ同じことを伝えるが、年次は欽明天皇戊午(五三八)年十二月、百濟から伝わったのは太子像・灌仏器・仏起を説く書卷一函とする。史実に近いのは『元興寺伽藍縁起』の所伝で『日本書紀』の所伝は編者の潤色が濃いいわれる。しかし年次における十四年のず

れと将来品目の異同、上表の文言における粗密をのぞけば、二つの所伝のあいだに、それほど大きな隔りがあるわけではない。

百濟の聖明王から欽明天皇に贈られた仏像についてみると、金銅釈迦如来像または悉達太子像、それに誕生仏が想定される。『元興寺伽藍縁起』によると灌仏器と仏伝が付随した形であるから「太子像」は誕生仏とみるのがふさわしいようである。また「太子像」を悉達太子像すなわち半跏思惟像とし、灌仏器には別の誕生仏が備わっていた、という考え方もある。いづれにしても、初期に伝わった仏像は金銅の釈迦像が主で、若わかしい感じの太子像や誕生仏が含まれていたのである。このうち誕生仏についてみると、遺品では、愛知県正眼寺蔵・銅造誕生釈迦仏立像(八・二センチ 飛鳥時代)や愛知県個人蔵・銅造誕生釈迦仏像(二一・一センチ 飛鳥時代)、東京国立博物館蔵・銅造摩耶夫人及び天人像(二六・六センチほか 飛鳥時代)、やや下って奈良県悟真寺蔵・銅造誕生釈迦仏立像(二一・六センチ 白鳳時代)などがあって形態はある程度類推できる。

ガンダーラでは紀元二、三世紀に仏伝彫像が盛んで、靈夢托胎・出胎・七歩行のさまなど、釈迦一代のことが表現されていた。あるいは、クシャーナ朝の石造浮彫仏伝図に

は托胎・出胎・灌水^②のさまを描く。また、六二九年インドへ旅立った玄奘は、インド羯若鞠闍国(カーニャクブジャ)の無遮大会で、宝壇に金の仏像を置き香水を灌ぐ行事をみ、その様子をつぶさに書留めている。^③国をあげての盛儀であったらしい。また義浄は『南海寄帰内法伝』に「灌沐」のことを記している。西国の諸寺では、寺院に宝蓋を張り金・銀・銅・石製の仏像を銅金・木石の盤に置き、香を塗り香水を灌ぎ浄白の氈で拭う。四月八日には仏像を路辺に出し道俗が灌ぎ洗う。^④贊寧は『大宋僧史略』でこれを「浴仏」と呼んでいる。^⑤

灌沐、浴仏に用いる仏像を誕生仏に特定できないが、敦煌壁画に描かれたような北魏時代の本生譚とあわせ、仏伝図が東アジアの国ぐにへ伝わり、浴仏、灌仏の儀がさかんになっていったようである。日本でも推古十四(六〇六)年四月元興寺伽藍が整うと、寺ごとに四月八日と七月十五日の設齋を恒例にした。^⑦元興寺では百済聖明王から贈られた灌仏の器を秘藏しており、四月八日の元興寺齋会(灌仏会)は、とりわけ重視されたはずである。^⑧

『日本書紀』と『元興寺伽藍縁起』に書かれた仏教伝来の記事にもどうう。二つの所伝とも、百済聖明王から贈られた仏像について、天皇が礼拝の可否を群臣に下聞したと

する。天皇じしん判断を避け、あえて礼拝の推奨をさしひかえたのである。はじめから仏教を支持し熱心に奨励したのは蘇我氏ということになる。また二つの所伝とも、仏教伝来に関して奇瑞めいたことは何ひとつ語っていない。百済王から仏像というものがはじめて贈られてきたというのに、奇瑞でかざることもなく群臣にはかって平静に処理した、という形である。

仏教は公に認められず、さしあたり仏像を蘇我氏があずかり私に礼拝することになった。『日本書紀』では、このあと疫病が流行して人民が多く死んだので、物部尾輿と中臣鎌子の訴えにより仏像を難波の掘江に棄て、仏をまつる建物を焼ぎ払った、という。『元興寺伽藍縁起』もほぼ同趣であるが、廃仏は欽明天皇三十年のこととし、欽明天皇は蘇我稲目に仏法支持の旨をあらかじめ漏らして、将来仏法を取立てる約諾があったように書いている。寺側で天皇の仏教支持の意思を明確にし、寺に対する国家の格別な扶助を訴える必要があったようである。

古代国家における仏教受容の実情はさまざまであった。その中で伝来した仏教に対する国王の態度表明、または仏教受容にかかわる国王の意思決定の仕方が、物語られ形づくられてゆく。そこに国家と仏教の関係が端的にあらわれ

るようである。

中国や朝鮮においてはどうかであろうか。

二

中国の仏教伝来について、諸説のうち主なものはつぎのようである。(一)秦始皇帝四(前二四三)年西域沙門釈利房らが經典を伝えたが、始皇帝が捕えて投獄した。夜丈六の金人が来て獄を破り救出したので、皇帝はひざまづいて拝礼した。(二)前漢武帝元狩元(前一二)年霍去病を遣わし匈奴を討ったとき、匈奴休屠王のまつっていた金人を武帝に献じた。武帝は金人を甘泉宮に安置して焼香礼拝したが、金人は仏像だという。(三)前漢哀帝元寿元(前二)年景廬という者が、大月氏王の使者伊存から仏教の口授をうけた。(四)後漢明帝永平十(六七)年明帝の夢に神人が光を放ち殿庭に降りた。西方に人を遣わし仏教を求めさせると、白馬に経像を積み東に向う迦葉摩騰と竺法蘭に会い、迎えて白馬寺を建てた。

いずれも伝説で、もとより史実とは認められていないが、(三)をのぞくと、いずれも仏教の伝来・受容のあり方を、皇帝の意思とのかかわりにおいて捉えている。なかでも(四)後漢明帝の求法説は、中国仏教史の巻頭をかざるにふさわし

い説として、しばしば引き合いに出されてきた。

この説は『牟子』『後漢書』あたりに出て、のち『洛陽伽藍記』『魏書』稽康志・『大唐西域記』などの書が冒頭に引き、定説化されたものようである。まず『牟子』理惑編の説。

昔孝明皇帝夢見神人、身有日光、飛在殿前、欣然悦之。明日博問群臣、此為何人、有通人伝毅曰、臣聞天竺有得道者、号之曰仏、飛行虚空、身有日光、殆將其神也、於是上悟、遣使者張騫、羽林郎中秦景博士弟子王遵等十二人於大月支。写仏經十二章、藏在蘭台石室第十四間、時洛陽城西雍門外起仏寺。^⑩

孝明帝の夢にあらわれた神人は、身に日光があり空を飛んで殿前に降り立った。インドという仏で、仏は虚空を飛行し身に日光があるという。帝はさっそく大月支へ人を遣わし経を写させ、洛陽門外に仏寺を起こし、また南宮清涼台と開城門の上に仏像を作ったという。

仏には威徳の光がそなわると説かれる。孝明帝の夢にあらわれた神人は、身光をそなえた金銅仏のようにも解せる。いずれにしても仏(像)の飛行と身光という、非常な奇瑞を示して明帝を感服させる。そして求法の意味をうながし

写經・起寺・造仏など、帝に仏教流通の政策を打出させたものである。

『後漢書』西域伝の方では、明帝の夢にあらわれたのは「金人」で長大。頂に光明があつて丈六尺、黄金色という^⑪。頭光をそなえた長大の黄金像である。仏像に一段と近づく。このような説の背景には三十二相の中の十四・身広長等相、十四・金色相、十五・丈六光相といわれるような仏身觀の発達があると考えられる。これらの説により、仏は頭光と身光をそなえ黄金色にかがやき、あらゆるものを超えた存在として觀念せられる。その超越的な存在である仏の意思が明帝に感応したことにより、中国の開明と仏教流通が保証された、というとするものである。

この説を『洛陽伽藍記』は序にかかげた。頂に日の光をそなえた仏が夢に現われ、その満月の如き顔が輝きわたってからは、洛陽の開陽門に白毫の仏像を莊嚴し、御陵に紺髪のお姿を描くことになり、それらしい人々は争って仏に帰依し、かくてその信仰は中国に広まったという^⑫。仏が明帝に感応したことにより、中国で本格的な仏像がつくり出され、仏教が全土にひろがったことになる。明帝の靈夢が洛陽伽藍のはじまりと理解されたのである。

洛陽西陽門の北、長秋寺の三重塔には六牙の白象が釈迦

を背に空中を飛行する像がとりつけてあった。仏像は黄金と宝玉でできていて、四月降誕会にこれら仏像をかつぎ練り歩いた^⑬。また昭儀寺はもと役人の邸であつたが地下から五色の光がさし、黄金の三尊仏を掘り出して寺にしたと伝える^⑭。城東の崇(宗)聖寺に高さ三丈八尺の仏像があり、端正で相好が具足している。降誕会のお練りに仏像が輝くばかりに光を放った。仏は光を放つのであり仏像は金色にかがやくように造られていたのである^⑮。

『魏書』釈老志も明帝求法説にはじまる。明帝の夢にあらわれたのは金人で、頂に白光があつた。求法のため天竺に人を遣わすと、摂摩騰と竺法蘭が洛陽に還るのに出会い、仏經四十二章と釈迦立像を得たという^⑯。この書の中に濟州東平郡の靈像の話のをせる。延興二(四七二)年仏像が輝を発して金銅色に変成することがあり、孝文帝が仏法興隆のしるしとして殺生を禁じたと伝える^⑰。

玄奘が西域からインドへ求法の旅に発つ。『大唐西域記』序に敬僭が明帝の夢をのせ、白日の光をおびた仏が姿をあらわし、神々しい光を万里の遠き中国に通じさせた、と述べている^⑱。玄奘の西域への旅は明帝求法の話にうながされた物語るもののように、明帝求法説は中国仏教史を語る前提として定着したかのようである。ついでに西域への

旅で玄奘が見聞した光る仏の例をあげてみよう。

屈支国(クチャ)⑩ 昭怛釐伽藍の仏足跡は齋日に光明を照らし輝くことがある。健駄羅国(ガンダーラ)の、迦膩色伽大塔西南にある白石の仏像は高さ一丈八尺、しばしば光明を放つことがある。⑪ 汲吒釐子城(摩揭陀国バータリプトラ城)の、菩提樹西北精舎の加葉波仏像は時に光明を輝かすことがある。⑫ 恭建那補羅国(コーンカナブラ)の、城側の伽藍にある栴檀の慈氏菩薩像は高さ十余尺、齋日に不思議な光を輝くことがある。⑬

玄奘が旅行に出かけた頃、中国から西域・インドにかけて都市で伽藍がさかえ、仏像彫刻は最盛期に入っていたようである。日本から道昭が白雉四(六五四)年に入唐し、長安で旅行帰りの玄奘の知遇を得、斉明六(六六〇)年帰国して元興寺禅院に住した。⑭ 日本で仏教を主導してきた蘇我氏が倒され、仏教は国家の所轄に入り、朝廷を中心に仏事が展開していた。律令による新しい秩序へのうごきの中で、仏教も中国から新しい法相学を受け入れ、教界の再編を進めていた。

朝鮮三国のうち、仏教ははじめ高句麗に伝わった。『三国史記』高句麗本紀によると、小獸林王二年(三七二)六月秦王苻堅が使と僧順道を遣わし、仏像と経文を送った。同五

年肖門寺を創建して順道を住まわせ、また伊弗蘭寺を建て、前年に来ていた阿道を入れた。⑮

つづいて仏教は百済に伝わる。『三国史記』百済本紀によると、枕流王即位(三八四)年晋から胡僧摩羅難陀が来たので、王が宮に迎えて礼敬した。翌年漢山に仏寺を建て僧十人を度した。⑯

高句麗と百済では、中国の秦と晋からそれぞれ僧が訪れ、王が歓迎して仏教を受け入れ、はやく寺を建てている。その間、奇瑞めいたことは語られず、仏教は国家の要望にかなない支持を得た形である。

新羅では事情が違ふ。過去二度にわたり高句麗から僧が訪れたが、仏教は支持を得ていなかった。法興王の代(五一四〜五三九)になって仏法を興そうとしたが群臣が賛成しない。王の心を知る近臣の異次頓という者が、死を決して衆人の言に逆い斬られた。死に臨み異事の起ることを仏に祈ると、斬り口から乳のような白い血が湧き出た。衆人は驚いて仏教を非難することをやめたという。真興王五(五四四)年になって興輪寺が建ち、出家が許された。その後、皇龍寺・祇園寺・実際寺が成り、同三十五(五七四)年皇龍寺丈六像を鑄成。銅三万五千七斤、鍍金一万一百十八斤を用いた。⑰ 公では排斥されていた仏教が、法興王治世の後半

におよんで公認され、真興王の治世に興隆したことになる。仏教排斥から公認へ政策変換させたのは異次頃の殉教である。仏教を衆に認めさせるため、近臣が王にはかり死を決して奇跡を示したという。漢明帝みずから金人飛來の夢をみ、仏教を西国に求め興隆にみちびいたという話とは対照的である。古代中国と朝鮮新羅における、王権の性格と構造のちがいが、王権と仏教のかかわり方の相違を暗示しているように思う。

三

欽明天皇十三年はじめて仏像が伝わった時、奇瑞のことは書かれていない。天皇は仏像を公に礼拝することを差控え、仏像を蘇我稲目に托した。蘇我稲目が小墾田の家に仏像を安置して礼拝していると、病気が流行って人が死ぬ。物部尾與と中臣鎌子が国神のたたりだと訴え、仏像を難波の掘江に捨て伽藍を焼きはらってしまう。仏教はここで排斥され地上から消えたことになるが、『日本書紀』(以下『書紀』と略称)にはこれについて次のような記載がある。

同十四年夏五月、河内国泉郡の芽渟海で梵音が雷の声のように鳴り響き、日の光のようにうるわしくてりかがやく。天皇が溝辺直に調べさせると、樟木が浮かび照りかがやい

ていた。取上げて献上すると、天皇は画工に命じて仏像二軀を造らせた。今も吉野寺で光を放つ樟の像がそれである。光の奇瑞につつまれた話で、『書紀』の記載の中でも異質の部分である。大和吉野比蘇寺(現光寺)に伝わった縁起にもとづくところのものが妥当であろう。

『日本霊異記』に同じ話を載せているが、少し違ふところがある。和泉国の海で耀く霊木をみつけたのは大花位上大部屋栖古連で、敏達天皇に奏上するが、天皇が本当にしないので皇后に奏した。屋栖古連は皇后の詔によって、得た楠で仏像を彫ることを許され、蘇我馬子の推奨する池辺直氷田に阿弥陀仏・二菩薩像を造らせたことになっている。のちに物部守屋が皇后に仏像排斥を迫るので、皇后は氷田に命じ仏像を稲の中にかくした。道場が焼かれ仏像が難波の掘江に流される中で、皇后のかくした仏像だけが残し、今も比蘇寺で光を放つという。楠の奇瑞に感じて仏像を造らせたのは敏達天皇の皇后(のち推古天皇)で、時代をさげ『書紀』の伝える第二回目の排仏のときにかけているのが特徴である。

比蘇寺縁起の原形について判然としないが、『書紀』が霊木漂着と造像を欽明天皇十四年のこととしたのは意図があると思う。前年秋十月百濟から仏像が公伝したが、欽明天

皇は公に礼拝を推奨せず蘇我稻目に托した。間もなく排仏がおこり仏像を難波堀江に棄てた。そのまま過ぎると『書紀』では敏達天皇十三(五八四)年秋九月百濟から鹿深臣が弥勒石像、佐伯連が仏像を伝えるまで、公に仏像不在になつてしまふ。しかも敏達十四年、いわゆる二度目の排仏で仏像が難波堀江に棄てられる。『書紀』敏達天皇即位前紀に「天皇、仏法を信けたまはずして、文史を愛みたまふ」と評したのはこの事を指す。そうなると排仏が二代にわたリ、仏教崇敬が歴史から消えることになる。この空白をうめるのが比蘇寺の光を放つ仏像の縁起であつて、事が第一次排仏の翌年すなわち欽明天皇十四年五月であるのも偶然でなからう。

前年の欽明天皇十三年に仏像がはじめて伝わってきたが、難波の堀江に流し棄てられた。今、和泉灘に西から靈木が漂着して梵音をひびかせ光彩しく晃り耀くと聞く。欽明天皇が感じて海から取寄せ、画工に命じて仏像を造らせた。その仏像が今に伝わり光を放つという。渡来した仏像の崇拜に積極的でなく、排仏を容認した形の『書紀』欽明朝の記述は、天皇の比蘇寺靈仏造像の話によって立直され、欽明朝は崇仏の王朝に模様替されたことになる。

和泉の海へ靈木漂着の話に類似したものに「善光寺縁起」

の所伝がある。『扶桑略記』欽明天皇十三壬申冬十月十三日辛酉条に、「善光寺縁起云」としてつぎのようにいう。

天國排開広庭天皇治十三年壬申十月十三日、從三百濟國「阿弥陀三尊浮」浪來、着日本國撰津國難波津、其後經三十七箇年、始知有「仏法」、仍以「此三體」為「仏像之最初」、(中略)月蓋長者遷化之後、仏像騰空飛到三百濟國、已經一千余年、其後浮來本朝。

釈迦在世のとき、天竺毗沙離國の月蓋長者の門に阿弥陀三尊が現出、長者は姿を金銅像に写し留めた。長者の没後、仏像は空にあがつて飛行し百濟國に至つて千余年をへた。それから浪に浮かび難波の撰津へ漂着したというのである。天竺から百濟に飛行し、百濟から波に浮かんで海を渡り難波津に着く、という発想に古代日本におけるアジアの地理観と、民族の古い伝承がうかがえる。和泉の海に漂着した靈木も海の彼方、韓あたりから渡来したもの、と考えられていたようである。

仏像漂着の類話は「六角堂縁起」にもある。『伊呂波字類抄』六角堂の項に「縁起云」として、六角堂如意輪觀音は淡路國巖屋の海に打寄せられたもので、小韓櫃に入れ鎖を差してあつたのを聖德太子が開けて持仏にした、という。唐櫃でなく韓櫃とするところに古代の人の朝鮮に寄せた思

いがかがえる。

「善光寺縁起」「六角堂縁起」の成立は平安時代中期以降のことだが、仏像が朝鮮から海を越えて渡ってきたという、初期仏教の頃の伝説を織り込み、時代を遡らせて世界をひろげている。時間や空間の隔りを越える掛橋が奇瑞であろう。仏像が海の彼方から渡ってきた日本であるが、中国では西の彼方から金人が飛来したり、砂漠の彼方から白馬が経巻を積んで来るのであった。

四

『書紀』や『元興寺縁起』が伝える欽明朝仏教伝来説とならんで、『扶桑略記』が伝えた繼体天皇十六年説がある。『扶桑略記』の欽明天皇十三年冬十月仏教伝来の条に「善光寺縁起」と並べて附載したものである。

日吉山葉恒法師法華驗記云、延暦寺僧禪岑記云、第二十七代繼体天皇即位十六年壬寅、大唐漢人案部村主司馬達止、此年春二月入朝、即結草堂於大和高市郡坂田原、安置本尊、婦依礼拝、举世皆云、是大唐神^⑤之出縁起。

繼体天皇十六年春二月案部司馬達止が日本に来て、大和高市郡坂田原に草堂を結び、本尊を安置して礼拝婦依し

たという。案部(鞍作)氏は百済の出身で、「大唐漢人」と冠するのは伝承であろう。「縁起」は鞍作氏が大和高市郡坂田原に建てた坂田寺(金剛寺)縁起と考えられる。仏教伝来といっても実情は特別改まった事でなく、渡来者が仏像や経巻そこばくを携えてきて、私に婦依礼拝した例も少ないであろう。

このような場合、渡来者がもたらした仏像は手軽に運べる、小形の金銅仏と考えられる。中国・朝鮮・日本に伝わる初期仏像で、個人の崇拜したものに小金銅仏が多い。いわゆる一搦手半の念持仏型である。ことによると、坂田寺に古様の小金銅仏が伝世していて、司馬達止が携えて渡来し坂田原の草堂に安置したもの、と言い伝えていたのかも知れない。

また、右にみたような坂田寺縁起の文を延暦寺僧の『禪岑記』に引き、それをさらに葉恒が『法華驗記』に載せた。そうすると坂田寺縁起には司馬達止の本尊安置のほか、達止の法華信仰または本尊礼拝に因む、何らかの奇瑞靈驗の類が語られていた可能性がある。

『一遍聖絵』第二に一遍が四国伊予の菅生寺で修行する段で、菅生寺の縁起が引かれている。日本に仏教がまだ流通していなかった頃、安芸の住人が伊予の菅生に狩りをし

に来て、金色の光を放つ古木の中から金色の観音像をみつけた。狩人はとりあえず弓を棟に菅蓑で葺き、草舎に観音像を納めて帰る。両三年して訪れてみると、草舎は朽ちて跡形もない。山や谷をさがし回り、生い繁る菅の中に本尊がかがやいているのがみつかった。そこで精舎を構えて莊嚴し、菅生寺と名付けたといふ。^⑤

狩人が弓を棟に葺で葺いた、というから草舎は小さい。したがって中に納めた仏像も小形のものである。また仏像が金色に光り、草舎が朽ちても茂みでかがやく、というから金銅仏とみるのがふさわしい。菅生寺の場合も、おそらく古様の金銅小観音像が寺にあって、由来を仏教伝来以前の時代にかけて語り伝えていたものようである。信濃善光寺や京都六角堂でも、古様の金銅阿弥陀三尊像や菩薩半跏像が伝世していて、先にみたような縁起を語っていたのである。^⑥

日本現存の小金銅仏について。松原三郎氏によると、仏教初伝の六世紀前半から後半にかけての遺品がなく、六世紀末ないし七世紀初めの資料として新潟県関山神社蔵・菩薩立像(二〇センチ)、東京国立博物館蔵・四十八体仏一五一号の如来立像(二三・四センチ)、同四十八体仏一五八号の菩薩半跏思惟像(二二・一センチ)があげられる。いずれも

朝鮮半島で製作され、製作時に近い頃に渡来したとみられている。前二体は東魏様式、後の半跏像は百済造像の特色をもつという。これに準ずるのが長野県観松院蔵・菩薩半跏像(三〇・〇センチ)で、四十八体仏一五六号の菩薩半跏思惟像(丙寅銘)や奈良県神野寺蔵・菩薩半跏像(二六・七センチ)は、百済将来像をモデルに飛鳥期に造られたものとみなされる。小金銅仏の中で、半跏思惟像が古くからよく造られたのである。^⑦

また久野健氏によると、六・七世紀に渡来した仏像とみられるものとして次のものがあげられる。東京国立博物館蔵・四十八体仏一四三号(中尊二八・七センチ)、同一五一号如来立像、同一五八号菩薩半跏思惟像、長野県観松院蔵・菩薩半跏像、新潟県関山神社蔵・菩薩立像、東京八王子市真覚寺蔵・如来倚像、宮城県船形神社蔵・小金銅仏(二五・〇センチ)。これらが飛鳥・白鳳仏の手法にされたとみられる。^⑧

「六角堂縁起」に淡路漂着と伝える観音像は、後世如意輪観音と称したところからも、古様の菩薩半跏像でなかったかと思う。「善光寺縁起」の伝える阿弥陀三尊像については、四十八体仏一四三号の三尊仏立像(中尊三四・一センチ、脇侍二四・〇、二四・五センチ)が六・七世紀の製作で、善光

寺本尊の模刻という伝えがある。いわゆる一光三尊と称され、一つの光背に三尊が立ち並び、光背は精巧華麗である。この形式は中国の龍門賓陽洞の石仏や北魏の金銅仏にみられ、朝鮮では韓国扶余美術館蔵・一光三尊像(八・五センチ扶余扶蘇山城址出土六世紀中葉、韓国潤松美術館蔵・一光三尊像(癸未銘)などの遺品が知られる。

青銅に渡金した金銅仏じしん金色にかがやく。それに頭光と身光、さらに飛天光ないし焰光を放つ光背が取付けられて、全体が光り輝くことになる。韓国の国立扶余博物館蔵・銅造釈迦像光背(二一・三センチ、建興五年銘)は、蓮弁形光背の周辺に火焰文をめぐらし、化仏三体を配する。その原流は中国南北朝時代の金銅仏に求められると共に、日本初期の釈迦像光背の形式に影響を与えたとみられている。^⑦奈良県法隆寺蔵・銅造釈迦如来及び脇侍像(戊子銘)の光背、さらに東京国立博物館蔵・光背(甲寅年銘)によび、飛天光・頭光・身光は複雑華麗になるが、祖型は扶余博物館蔵光背にたどれるようである。

青銅に渡金した金銅仏じしん粲然とかがやき、光背を伴い光を火焰のようにゆらめき放つ。韓国国立中央博物館の金銅如来像(延嘉七〇己未銘一六・二センチ)は、仏像と光背と台座を一鑄し、光背に火焰光の線条を鑿で彫りつけ、ま

ばゆく、ゆらめきかがやく感じである。^⑧

朝鮮・日本の小金銅仏の原流、中国では造像は金銅仏にはじまるといわれ、五胡期の小金銅仏だけで現在四十体以上が知られる。^⑨丈六の大型金銅仏もさかんに造られた。北魏では石仏が主流のようであるが、金銅仏の造像も併せて行われ、小金銅仏の遺品も多い。たとえば銅造如来立像(五三・五センチ大平真君四年銘)、東京個人蔵・銅造釈迦来坐像(二六・〇センチ 五世紀)、金銅仏立像(皇興五年銘)、東京個人蔵・銅造釈迦如来坐像(四〇・〇センチ 太和元年銘)、メトロポリタン美術館蔵・金銅弥勒仏立像(五九・〇センチ 正光五年銘)など。

南朝の劉宋では金銅仏の造像がさかんで、元嘉十二(四三五)年銅像を造るのに勅許を要すると定めたほどである。遺品として元嘉十四(四三七)年の銘をもつ、東京永青文庫蔵・銅造如来像(二九・四センチ)に注目したい。この像は全体におだやかなつくりで、丸味をおびた顔や衣紋の平行曲線に中国様式が濃く、南朝様式の一典型とみられる。^⑩頭光と身光の単純さが火焰の素朴な力強さを引き立て、もえあがり照りかがやくようである。仏の光というものにこめる思いがよく現われている。光背の思想の起源はイランに求められもする。^⑪それがガンダーラの仏像にとり入れられ、

中国の金銅仏に至って著しい発展をとげたようである。その背後に仏の光に対する思想の展開と、青銅の材質にもとづく技巧上の発達があったと思う。

五

ガンダーラにおいて初期仏像は仏伝図の釈迦像として出現し、その釈迦像に頭光があった。ガンダーラ初期の仏陀像として知られる、カラチ国立博物館蔵の階段蹴込み浮彫「祇園布施」(二世紀末)の仏陀像に円形の頭光が見える。

同類の「仏誕灌水」「仏誕七步行」(ベジャワール博物館蔵)の場面における仏陀像も同様で、釈迦の誕生や太子像にも頭光がある。いずれも無地の単純な円板形を後頭部につけている。やがて礼拝の対象としての釈迦の単独像が成立すると、頭光は正面向き無地の円板で明確な形をとる。後になると周縁に同心円を刻みつけたり、周辺に樹葉を細く連ねたものや、左右に礼拝者を浮彫りにしたものが現われるようになる。マトウラーの仏像にも頭光があって、円の周縁に半円形を連ねる、いわゆる連弧文を刻みつけるのが特徴である。

インド古代の貨幣に神や王の肖像を浮彫りにし、頭光をあらわしたものがあって、ガンダーラ仏やマトウラー仏の

頭光の背景として指摘されている。サカ族のマウエース(前一世紀前期)の貨幣の神像に輪形の頭光があったり、クシャーン朝のカニシカ王の貨幣に仏陀を含む神々や王の肖像に頭光や身光がみえる。しかし仏像の頭光との具体的なつながりについては、はっきりしないようである。

このような仏の身相・光相についての説が、仏像の頭光・白毫・肉髻から身光・焰光におよび、莊嚴華麗な仏像や光背を造り出させる背景にあった。そして仏像がいったん造りはじめられると、製作の過程で仏像全体の莊嚴さと華麗さが独自に追求されるようになり、仏像の需要と共に技巧を凝らすようになったと考えられる。

日本の初期における、大乘経典と造仏のことに観点を移してみよう。『書紀』によると推古十四(六〇六)年聖德太子が『勝鬘經』と『法華經』を講説したという。これに先立ち四月八日に丈六金銅仏を元興寺金堂に安置し、寺毎に四月八日と七月十五日の設齋をはじめている。丈六金銅仏の方は前年四月詔により鞍作鳥が製作にかかり、高麗の大興王から黄金三百両が寄せられたという^④。

『書紀』は聖德太子の大乘経典講説を、元興寺金堂丈六金銅仏造立と一具のこととしてとらえ、「朕、内典を興隆せしめむと欲ふ^⑤」という詔の一環とみなしたように見える。

その前提に推古三年高麗僧慧慈と百濟僧慧聡の渡来があり、慧慈を聖徳太子の師とし、二人の僧が仏法の棟梁として元興寺に住した、という段階が踏まれている。日本において、ようやく仏教の理解が本質にせまり、大乘經典にもとづく造像・起塔が本格化する段階に入った、と言おうとするもののである。

大乘經典には仏の光相について説くところが多いが、『勝鬘經』では「仏、空中において普く淨光明を放ち、無比身を顯示したもう」(真実義功德章)。「まさに作仏を得んに普く光如来遍知と号す」(同上)。「時に世尊、勝光明を放ち普く大衆を照らし虚空に昇りたもう」(勝鬘章)など。説法のはじめと終りのところでは、仏陀が空中で「淨光明」「勝光明」を放つ。

造寺・造像の裏づけをするのに『法華經』ほど適切な經典はない、といわれる。『法華經』に説く仏の光相についての部分をみると、たとえば、世尊が説法に先だち「大光明を放ち東方万八千の土を照らしたもう」(序品)。「一切の毛孔より無量無數の色の光を放ちて、皆悉く遍く十方の世界を照らしたもう」(如来神力品)。「大人相の肉髻より光明を放ち、及び眉間の白毫相より光を放ちて、遍く東方百八十万億那由他の恒河の沙に等しき諸仏の世界を照らしたも

う」(妙音菩薩品)。「威徳熾盛にして光明照耀し、諸相具足すること那羅延の堅固なるが如し」(同上)など。このほか『法華經』には日月灯明如来・妙光菩薩・燃灯仏など、光相を名のる仏・菩薩が登場して教義上重要な役割を担っている。

仏のこのような身相・光相の説が丈六金銅仏造立の思想となり、あるいは安置された仏像の世界を開くことが予想される。事実としても、このころ朝鮮から渡来者によって伝えられた小金銅仏も少なくなく、国内でも渡来工人により小金銅が作られたようである。推古二(五九四)年二月三寶興隆の詔により諸の臣・連らは君親の恩のために仏舎を造ったという。有力な氏族が仏舎に仏像を安置し、仏像が各地で礼拝され尊厳をそなえる中で、靈異を示す仏像も出現するようになる。仏像が各地で尊厳や靈異を増すと、支配の立場からこれらの仏像の尊厳を超え統べるものが気になる。元興寺金堂丈六像安置や聖徳太子による大乘經講説は、丈六という超越する仏身のもとに法界を演説し、仏教の統一理念を表わそうとするもの、とみることができ。舒明十一年(六三九)百濟大寺の造営がはじまり、翌年唐の学問僧惠隱が『無量壽經』を講説。改新後の皇極天皇白雉三(六五二)年にも惠隱が内裏で『無量壽經』を講じ論義

を行なっている。『無量寿経』には「仏の遊履するところの国邑丘聚、化をこうぶらざるはなし。天下和順し日月清明なり。風雨ときをもてし災厲おこらず。国ゆたかに民やすくして兵戈もちいることなく」(下巻)など、新政国家を擁護するにふさわしい文言がある。また無量光仏・観世音菩薩・超日月光仏など、無量寿仏の光相を示す名があり「光明ことごとく照らして、このもろもろの国に遍くせん」「たとい我、仏を得んに能く限量ありて、下、百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚をとらじ」(上巻)など、仏の光相について説くところが多い。唐から帰ったての惠隱の講説に、仏の光の照らす「国豊民安」の土を描き、仏教界の編成統一をはかったものである。

百済大寺はのち高市郡に移し大官大寺と改め、九重塔・金堂を建て丈六像を造った。丈六像について明らかではないが、元興寺金堂丈六像とならび、新政国家のささえとして荘厳されたであろう。藤原京では薬師寺を建て金堂に本尊薬師瑠璃光如来を安置した。さらに平城京に移ってのち諸国に国分寺を造立して金光明四天王護国寺と名づけ、金銅盧舍那大仏を安置する東大寺は大倭国分金光明寺と呼んだ。金光明を遍く諸国におよぼし、壮大な仏の世界を荘厳して国家を包み飾る、という。それじしん律令国家によ

って作り出される物語の世界とみることができ。

盧舍那大仏造立に用いた熟銅七十三万九千五百六十斤、練金一万四百四十六兩。国銅を尽す、という。大仏造立により小金銅仏は影をひそめてしまいが、律令国家の解体過程で生彩をとりもどす。平安時代中期ごろ、諸寺の間で伝世の古様本尊の靈異を掲げ「縁起」に語りはじめるのである。

たとえば四天王寺・法隆寺・石山寺・六角堂・善光寺など。これら靈場に聖が集まり仏教に新しいうごきが見えてくる。その中で法然・親鸞・一遍らが登場して念仏をすすめた。とりわけ親鸞と一遍がそれぞれ六角堂と善光寺本尊に祈請し、宗教的生命をよみがえらせ、仏号のなかに輝く法の世界を開いていることに注目したい。とくに親鸞は中世国家に対峙して光明と名号の徳を説き、中世民衆の蒙をひらいた。

註

- ① 田村圓澄氏「平駒思惟像と聖徳太子信仰」(『新羅と飛鳥白鳳の仏教文化』東京 一九七五)
- ② 高田修氏『仏教の起源』(東京 一九八三) 図版二〇・二一、奈良国立博物館『ブッダ釈尊』(奈良 昭和五九) 彫刻五二、樋口康隆氏監修『バキスタン・ガンダーラ美術展』(東京 一九八四) 図版Ⅱ-4・Ⅱ-5 ほか参照。

- ③ 『大唐西域記』 卷第五 六国羯若鞠闍国『大正新修大藏經』(以下『正藏』と略称) 第五二卷・(四)八九五ページa。なお、以下『大唐西域記』の取意または訳文は水谷真成氏訳『大唐西域記』(『中国古典文学大系』二二、東京 一九八四版)による。
- ④ 『南海寄帰内法伝』 卷第四・三一 灌仏尊儀『正藏』第五四卷・(一)二二六ページc～二二七ページa。
- ⑤ 『大宋僧史略』 卷上・四 創造伽藍 付澄仏行像『正藏』第五四卷・(一)二二七ページc。
- ⑥ 敦煌文物研究所編『敦煌壁画』(北京 一九六〇) 彩色插頁1・北魏・尸毘王本生故事・二七五窟北壁、同編『敦煌壁画集』(北京 一九五七) 4 仏伝故事画(魏二五七窟) ほか参照。
- ⑦ 『書紀』同十四年条。
- ⑧ 『元興寺伽藍縁起』
- ⑨ この伝説について詳しい分析・批判を加えたものに常盤大定氏『漢明求法説の研究』(『東洋学報』第十卷 大正九)がある。
- ⑩ 『牟子』一卷(『平津館叢書』第一 帙第三冊)
- ⑪ 『後漢書』卷八十八・西域伝第七十八(中華書局出版『後漢書』第五冊・伝四・二九二二ページ)
- ⑫ 『洛陽伽藍記』序(『正藏』第五一・(四)九九九ページa)、以下この書の取意または訳文は入矢義高氏訳『洛陽伽藍記』(『中国古典文学大系』二一 一九八四 東京)による。
- ⑬ 同右(『正藏』同一〇〇二二ページc)
- ⑭ 同右(同、一〇〇三ページc)
- ⑮ 同右(同、卷第二 一〇〇五ページb)
- ⑯ 『魏書』卷百十四・釈老志第十二十(中華書局出版『魏書』第五冊・志三〇二五ページ)
- ⑰ 同右(同、三〇三八ページ)
- ⑱ 敬播・大唐西域記序(『正藏』第五一卷・(四)八六七ページb)
- ⑲ 『大唐西域記』卷第一(同右 八七〇ページb)
- ⑳ 同右 卷第二(同八八〇ページa)
- ㉑ 同右 卷第八(同九一六ページc)
- ㉒ 同右 卷第十一(同九三四ページc)
- ㉓ 『続日本紀』文武天皇四年三月己未条。
- ㉔ 『三国史記』卷第十八・高麗本紀第六(朝鮮史学会編『三国史記』三ページ)
- ㉕ 同右・卷第二十四・百濟本紀第二(同七ページ)
- ㉖ 同右・卷第四・新羅本紀第四(同、三ページ)
- ㉗ 『書紀』『元興寺伽藍縁起』とも。
- ㉘ 『日本現報善惡霊異記』上巻・信敬三宝得現報縁第五(遠藤嘉基・春和男氏校注『日本霊異記』八〇～八三ページ)
- ㉙ 『新訂増補国史大系』第十二巻・二八ページ。
- ㉚ 藤田経世氏『校刊美術史料』寺院編・上巻・一八七ページ。
- ㉛ ↓㉙二九ページ。
- ㉜ 『一遍聖絵』(『時宗全書』四ページ)
- ㉝ 拙稿「草堂について」(大谷大学国史学会編『日本人の生

活と信仰』一九七九 京都)において、小金銅仏の信仰を寺院縁起との関係でのべている。

③④ 松原三郎・田辺三郎助氏『小金銅仏』(昭和五四 東京)

③⑤ 久野健・田枝幹宏氏『古代朝鮮仏と飛鳥仏』(昭和五四 東京) 七〇一六ページ。

③⑥ 奈良国立博物館『日本仏教美術の源流』(昭和五三 奈良) 二三ページ図版・解説参照。

③⑦ 同館『ブツダ積尊』八三ページ図版、二九一ページ解説参照、③④図版一〇〇一ページ。

③⑧ ↓③④図版一二一三。

③⑨ ↓③④『小金銅仏』二五九ページ参照。

④⑩ 大阪市立博物館編『六朝の美術』(昭和五一 東京) 図版六

一 ③④『ブツダ積尊』八一ページ図版参照。

④⑪ 山本智教氏「仏像の起源について」(『仏教芸術』一七号 昭和二七・一二) 参照。

④⑫ ↓(2)『仏像の起源』図版一四〇一七ページ参照。

④⑬ ↓(2)『仏像の起源』八六ページ、『パキスタン・ガンダーラ美術展』一一〇〇一二ページ図版参照。

④⑭ 『書紀』推古天皇十三年四月辛酉条。

④⑮ 同十四年五月戊午条。

④⑯ 横超慧日氏『法華思想』(一九八〇 京都) 序章五ページ。

(本学教授 日本仏教史学)